

レクチャー・コンサート&国際シンポジウム（ヴァナキュラー文化研究会）  
立命館大学大学院文学研究科・「英語圏文化専修」設立記念行事  
日本とアメリカ，歌の架け橋—スティーブン・フォスター歌曲の受容と展開

## はじめに

ウエルズ恵子

2013年12月7日に行なわれたレクチャー・コンサート&国際シンポジウム『日本とアメリカ，歌の架け橋——スティーブン・フォスター歌曲の受容と展開』は，5時間という長時間にもかかわらず多くの方々の参加を得て，たいへん充実したものとなった。京都市内のみならず，九州や関東からわざわざお越しくくださった方もあった。参加者の年齢層も幅広く，高校生からご高齢の方まで男女取り混ぜ幅広い方々にお集まりいただくことができ，喜んでいる。赤ちゃんを連れてお母さんもいらした。フォスターの歌がどれだけ日本で愛されているかということ，あらためて認識した一日だった。

「オールド・ブラック・ジョー」「おお，スザンナ」「ケンタッキーの我が家」「夢路より」などを作詞作曲したスティーブン・フォスターは，アメリカ合衆国のポピュラーソングライターの先駆者である。彼の歌曲の多くはアメリカの国民的愛唱歌であるだけでなく，世界的な愛唱歌にもなっている。フォスター歌曲の日本への上陸は，日米関係の始まりとともにあった。そのフォスター歌曲のアメリカ合衆国での受容背景と，日本の文化風土に根ざした日本での愛され方は詳しい研究に値する。一方で，日本におけるフォスター研究は決して盛んとはいえない。本企画はその現状を打開し，「フォスターのアメリカ性」や「フォスターの日本での受容」について考え，さらに「デジタル時代におけるフォスター歌曲の展開」を展望する学術的催し物だったのである。

ディーン・ルート氏の講演とシンポジウムでの各講師の報告は，「日本とアメリカ，歌の架け橋」というタイトルにふさわしく，「フォスター」という人物と彼が生み出した文化現象を多方面から検討していた。内容は本誌に記載の通りである。この企画の価値をさらに高めてくれた音楽部分——ジョー・ウィード，マーサ・ケンダル，ディーン・ルートによるミニコンサートやワークショップ——では，フォスター曲の時代背景や，歌が生まれた風土，現代への歌の継承と展開について，ユーモアを交えながら豊富な情報もたらされた。もちろん心を和ませるフォスターの名曲の数々も。

ヴァナキュラー文化研究会では，生き生きと動いている日常の文化と私たちの研究とが交わり，外に刺激を与えかつわたしたち自身が刺激を受けながら，さらに研究が深まることを目指している。今回の企画は，その思いを実現する良い機会となった。私たちはこうした研究活動によって，日本とアメリカといった地理的境界や，19世紀20世紀21世紀といった時間的境界，音楽や文学やダンスといった文化分野での境界，さらには言語学や文学や社会学といった研究分野の境界など，いろいろなギャップに橋をかけていきたいと思っている。

# The Expansion of Stephen Foster Songs in Japan: from their Reception in the Meiji Period to Acculturation in our Digital Age

Keiko WELLS

## PROGRAM

The songs of Stephen Foster are the earliest examples of Western songs that the Japanese first appreciated after the country opened up to the Western world in the late nineteenth century. Since then, Foster songs have been well loved by the people. Even in 2013, young people learn them in music classes during their elementary school and junior high school years. The academic study of Foster songs in Japan, however, is not fully recognized. While excellent individual studies exist, the background of the original songs and the acceptance of them, for example, are not widely known to the general audience. The presently planned lecture-concert-symposium on the theme of “The Expansion of Stephen Foster Songs in Japan” is, therefore, an ambitious and significant attempt at examining this subject. It looks at the history of song reception in the Meiji era and predicts the future of the adaptation of Foster songs through digital media in the global context.

(Keiko WELLS)

## Part 1 LECTURE · CONCERT

Moderator: Prof. Kazuko Miyashita

Opening Addresses:

Prof. Masaki Sakiyama (Director of International Institute of Language and Culture Studies, Ritsumeikan University)

Prof. Shigemi Nakagawa (Dean of the Graduate School of Letters, Ritsumeikan University)

Prof. Keiko Wells (Representative of the Vernacular Study Group, IILCS, Ritsumeikan University)

Keynote Speech: Prof. Deane L. Root, “Foster Songs as American Vernacular”

Deane L. Root (Editor in Chief, *Grove Music online*, OUP: Professor and Director of Graduate Studies, Department of Music: Director and Fletcher Hodges Jr. Curator, Center for American Music, University of Pittsburgh)

♪ Foster Concert: Opening Instrumental Fiddle Medley performed by Marty Kendall and Joe Weed:  
(My Old Kentucky Home; Oh, Susanna; Camptown Races; Angelina Baker)

## Part 2 SYMPOSIUM

Moderator: Prof. Keiko Wells

### ♪ Foster Song Workshop

Songs performed by Marty Kendall, Deane Root, and Joe Weed:

- 1 Oh, Susanna
- 2 Old Folks at Home
- 3 My Old Kentucky Home
- 4 Angelina Baker
- 5 Old Black Joe
- 6 Hard Times Come Again No More
- 7 Camptown Races
- 8 Gentle Annie and Little Annie/When the Springtime Comes Again
- 9 Beautiful Dreamer
- 10 Nelly Bly

### Symposium

Dr. Sondra Wieland Howe (Independent scholar), “American Music in Meiji Era in Japan”

Prof. Kazuko Miyashita (Professor emerita, National Institute of Fitness and Sports in Kanoya),  
“Rediscovering Stephen Foster” (in Japanese)

Prof. Deane L. Root, “Predicting the Future of Foster Songs” / Commentary to the symposium  
lecturers

\*

### プログラム

スティーブン・フォスターの歌曲は、日本が19世紀後半に開国し、日本人が楽しむようになった西洋音楽の初期の代表といえる。それ以来、フォスター歌は日本人に愛され続けてきた。2013年においても、生徒たちは小学校や中学校の音楽の授業でフォスター歌曲を学んでいる。しかしながら、フォスター歌曲の歴史については、あまり注目されてこなかった。個人レベルでの優れた研究はあるが、歌の背景やその受容については一般聴衆に広く知られていない。それゆえ、「日本におけるスティーブン・フォスターの普及」というテーマでのレクチャー・コンサート&シンポジウムは、野心的かつ意義深い試みといえる。本企画では、明治期におけるフォスター歌曲の受容史を見据えるとともに、フォスター歌曲のデジタル・メディアを通じた適応の未来

について、グローバルな文脈で展望する。なお、本企画は、立命館大学大学院文学研究科に「英語圏文化専修」が新たに設立された記念行事でもあることを付記したい。(ウェルズ)

## 第1部

司会：宮下 和子

開会の挨拶：

崎山政毅（立命館大学国際言語文化研究所長）

「英語圏文化専修」設立にあたって：中川成美（立命館大学大学院文学研究科長）

スティーブン・フォスター・シンポジウムの開催にあたり：ウェルズ恵子（ヴァナキュラー文化研究会代表）

基調講演：“Foster Songs as American Vernacular”「スティーブン・フォスターとアメリカ」

ディーン・L・ルート（ピッツバーグ大学音楽学部教授，フォスター記念館館長）

♪コンサート

ジョー・ウィードとマーティ・ケンダルによるフィドル演奏，フォスター曲メドレー

（「ケンタッキーの我が家」「おお，スザンナ」「草競馬」「アンジェリーナ・ベイカー」）

## 第2部

司会：ウェルズ 恵子

♪ フォスター楽曲ワークショップ

ジョー・ウィード，マーサ・E・ケンダル，ディーン・L・ルート

（曲名は英語プログラムを参照）

シンポジウム

ソンドラ・ウィーランド・ハウ

“American Music in Meiji Era Japan”「明治時代のアメリカ音楽受容とフォスター」

宮下和子（鹿屋体育大学名誉教授；立命館大学国際言語文化研究所客員研究員）

「スティーブン・フォスター再発見」“Rediscovering Stephan Foster”

ディーン・L・ルート

“Predicting the Future of Foster Songs”「フォスター歌曲の展望」

